木を植えよう、今すぐ

地域の原種 大切に

自然災害 森が守る
宮脇さん

再植林事業 協力を
マータイさん

「これからもずっとお付き合いを」と語るマータイさん（左）と宮脇昭さん＝毎日新聞東京本社で

「環境破壊から地球を守るため、今すぐ木を植えよう」――。環境分野で初のノーベル平和賞を受賞したケニアの副環境相、ワンガリ・マータイさん（64）が先月、京都議定書発効記念行事に出席するため、毎日新聞社の招きで来日した際、「ふるさとの木によるふるさとの森づくり」を進める財団法人国際生態学センター研究所長の宮脇昭さん（77）＝横浜国立大学名誉教授＝と対談、植樹による緑の再生を世界に呼びかけた。約30年間で、3000万本の木を植えてきたマータイさんと宮脇さん。森づくりを通じ地球の環境保護にかける二人には、人類生存の基盤である地球への思いと、人間への限りない愛があふれていた。【司会は毎日新聞東京本社地方部編集委員・成井哲郎、写真は同本社写真部・小出洋平】

MOTTAINAI
Reduce　Reuse　Recycle
Wangari Maathai

―アフリカでの森林破壊についてどんな認識をお持ちですか。

マータイさん　森林破壊は、地球規模で進んでいますが、アフリカも例外ではありません。今も、急速に森林が失われつつあります。アフリカでは多くの人たちが、辺ぴな地域で暮らしています。この人たちは、とても貧しく、食糧を安定的に確保するため土地を開墾し、燃料として薪を使っているため、木を切らざるを得ないのです。また、牧畜活動が盛んに行われていることもあるでしょう。こうした木の伐採によって、土壌が流出する事態が続いています。このまま森林破壊が進めば、地球温暖化にも深刻な影響を及ぼしますので、心配しています。

宮脇さん　森をすべて残すことができれば理想的なんですが、人間が生きるためですから、木を切ったりすることもある程度は、やむを得ないでしょう。また電気や車をまったく使わないわけにもいきません。いくら省エネ対策をがんばっても、二酸化炭素の排出をゼロにすることは出来ないと思います。そうであれば、我々が今すぐにやらなければならないことは、すべての地域で木を植えることではないでしょうか。地球に住む60億の人たちが一人10本の苗木を植えたら、どうなりますか。荒れ地や砂漠は、多様な防災緑環境保全林に変わり、地球規模の温暖化にも十分対処できると思います。

マータイさん　私も、多くの人がまず、苗を作り、育て、植えることが大切ではないかと考えています。特に森林、苗から木が成長するまでを見届けることが重要ではないでしょうか。ケニアでの植林活動は順調ですが、アフリカの他の国々では、資金不足で活動があまり進んでいないのが実情です。植林活動は、植える人のトレーニングが大事ですが、ノーベル賞でいただいた賞金などをもとに、人材育成のためのセンターを設置したい、と考えています。こうした運動をさらに他のアフリカ諸国にも広げていきたいですね。

―宮脇さんは、「潜在自然植生理論」に基づき、土地本来の主木を中心にできるだけ多くの樹種を混植、密植するのが特徴ですが、マータイさんは、どんな方法で、どんな木を植えていますか。

マータイさん　活動を始めたころは、女性たちが植樹に参加しやすいよう、女性の好む樹種を中心に選びました。燃料の薪や家畜を飼った時のフェンスにもなり、土壌の流出を防ぎ、暑い時には木陰を提供してくれるような木。でも、こうした木は外来種が多く、その土地の生態系を破壊してしまうんです。例えばユーカリは、非常に成長が早く、薪やフェンスにもなるので、よく植えましたが、土地の水分まで、生物多様性も破壊してしまいます。

宮脇さん　おっしゃる通りです。植樹に当たって大事なのは、土地本来の主役の樹種と、それを支える三段五層の樹種を取り違えないことですね。私の50年に及ぶ現地調査の経験からも、何が主役の樹種であるかは、現場で調べれば、すぐ分かります。自然はかすかな予兆を発していますからね。地球の砂漠や荒れ地の3分の2は、マンメイドで、人間によってできたものです。密植な作業ではありますが、根の充実した幼苗をエコロジカルな苗木にしたがって混植・密植すれば、緑の回復は可能なんです。

マータイさん　我々の森林には、国有林にユーカリやマツなどの外来種を植えたため、今、森林破壊が急激に進み、困っています。なんとしても地域の生態系を維持しようと、再植林活動を行っているのですが……。

宮脇さん　森は、人類が生きる基盤であり、その森が現在、音を立てずに消えています。今、人間が緑を求めているのは生物的本能からなんですね。人類一人一人の命と文化、遺伝子を守る森を回復し、未来につなげなければなりません。

――地球の環境問題で日本はどんな役割を果たし、市民は何をしたらよいのでしょう。

マータイさん　日本には京都議定書の発効に際し、強力なリーダーシップを発揮していただきました。今後はアフリカの再植林活動やコンゴ川流域の森林エコシステムの保全にも力を貸してほしい。また、市民の方々も、個人でも集団でもいいから、まず活動を始めてください。それには、木を植えることが一番いい、と思います。そして日本に根づく「もったいない」の精神を環境運動にもぜひ生かしてほしいです。私も、この精神を世界に広げていきます。

宮脇さん　同感です。人類の生存と生活環境を未来に保障する土地本来の森は、地球温暖化の元凶である二酸化炭素を吸収し固定する能力も大きいのは加入、防災・環境保全機能も併せ持っています。全段は市民。今すぐ足元から額に汗し、木を植えましょう。

主役は全地球市民

横浜国大名誉教授　宮脇 昭さん

みやわき・あきら　1928年、岡山県生まれ。ドイツ植生図研究所で2年間、潜在自然植生理論などを学ぶ。帰国後、全国一万数千カ所で植生調査。横浜国立大学教授、国際生態学学会長などを経て現在、(財)国際生態学センター(http://www.jise.or.jp)研究所長。その土地に生えていた「ふるさとの木」を使い、混植、密植する独自の植樹法で国内1220、海外300カ所で森づくりを指導。特に、マレーシアのボルネオ、ブラジルのアマゾンでは、熱帯林再生に成功。中国でも森づくりに当たる。専門は植物生態学。「日本植生誌」など著書多数。「植物と人間」で70年度毎日出版文化賞。

ケニア副環境相 ワンガリ・マータイさん

1940年、ケニア生まれ。生物学者を志し、米国に留学後、71年にナイロビ大（ケニア）で博士号を取得。77年に「グリーンベルト運動」を創設した。農村女性に植樹を通じた社会参加を呼びかけ、これまでにアフリカで20カ国以上、約8万人が参加している。植林活動を女性の地位向上や民主化につなげようとする姿勢はモイ前政権の弾圧の対象となり、水力発電所工事での森林伐採に反対して逮捕された。モイ政権が倒れた02年の国会議員選挙に当選し、副環境相に就任。環境保護と民主化への功績が評価され昨年12月、環境分野では初めてノーベル平和賞を受賞した。

対談、終始和やか

対談は、昼食をはさんで1時間半に及んだ。植樹祭、植えた本数など共通点も多く、この日が初対面とは思えないほど対談は終始、和やかに進んだ。特に、宮脇さんが「大事なことは、土地本来の樹種を取り違えないことと持論を展開すると、外来種の植樹で失敗した経験を持つマータイさんも大きくうなずき、お互いに手を取り合う場面が何度もあった。

――宮脇さんは、スマトラ沖大地震直後、災害から命を守るため「被災地に木を植えよう」と毎日新聞のインタビューの中で提案されています。

宮脇さん　我々が調査した80年代、タイのプーケット島の水際には、樹高20～30㍍のマングローブが生い茂っていました。その後の急激な観光開発で木々が次々切り倒され、砂浜に変わってしまいました。こうした開発が被害を一層大きくしたのではないでしょうか。もう少し森を残していれば、被の侵入を弱める木の波砕効果で、住民も逃げ出す時間ができたはずです。土地本来の森は、人間によって原生自然植生　すべての人間活動を停止した場合の、その土地本来の緑のこと。元々の森は、家畜の過放牧や火入れ、農耕などによって失われており、現代の森は、人間によって原始化粧を施された仮の姿ともいえる。化粧を取り除いた素顔がどんな状態であるか、自然の残すかすかな情報をもとに読み取ることが大事。ちなみに日本列島の潜在自然植生は、ほとんど森である。

マータイさん　確かに植樹への考え方などをめぐっても、私たちは似た者同士かもしれませんね。宮脇先生の森づくりには、地球への思いや人間を愛する気持ちがあふれており、心から敬意を表します。研究分野で、すばらしい協力関係ができます。ケニア環境省には、人を動かす動員力がありますので、宮脇先生には植生調査や植樹指導などの面でご支援いただければ、うれしいです。ケニアにある主要な山の一つは旧宗主国がユーカリなどの外来種を植えたため、森林破壊が急激に進んでいます。まず、ここで、その土地の原種の木で再植林事業をパイロットプロジェクトとして始めてみるのは、どうでしょうか。成功すれば、ケニア政府もきっと納得し、他の山にも広げたい、と思うでしょう。私たちのグリーンベルト運動に加え、こうした新しい森づくりのパイロットプロジェクトが成功すれば、アフリカでの緑の回復は、大きく前進すると確信します。

「もったいない」世界語に

今回、マータイさんが感激した日本語に「もったいない」という言葉がある。来日当日のインタビューで、観覚義邀・毎日新聞東京本社編集局長から、ごみの減量や再使用、再活用にあたっては、日本では「もったいない」という言い方をする、と聞かされた。資源の持続的活用を求める表現としては、まさに我が意を得たりの言葉。気に入ったマータイさんは、滞在中、各地を訪れるたびにこの言葉を繰り返し引用し、自ら世界に発信することを約束した。小泉純一郎首相と会った際も、「もったいない」談議に花が咲き、若者との交流会でも「『もったいない』を実践する方法を考えてほしい」と呼びかけた。シンポジウムでは、さらに一歩踏み込んで「もったいない運動」のネットワーク構築を訴えた。今月4日、ニューヨークで開かれた国連婦人の地位向上委員会では、リデュース（ごみの減量）、リユース（再使用）、リサイクル（再利用）の3Rにリペア（修繕）を加えた4Rによる「もったいない」運動を説明した。